

企画展「秋田藩の絵図」開催までの道のり

令和5年4月末から開催された企画展「秋田藩の絵図―描かれた城と城下町―」は、私が初めて担当した企画展でした。以下、時系列に沿って開催に至るまでの取り組みを紹介します。

◆令和4年9月

開催時期が令和5年春となることが正式に決まり、本腰を入れて準備を始めざる得ない状況となりました。絵図を紹介する展示にしたいとこれまで漠然と考えていましたが、秋田藩の城絵図（久保田・横手・大館の城絵図）に焦点をあてることに決め、候補となる展示資料をリストアップする作業に取りかかりました。

◆令和4年11月

この頃から館外の施設等へ足を運び、資料調査を行いました。調査のための出張先は秋田市内の他、横手市と大館市でした。調査の際には資料の状態を確認して写真を撮影すると共に、その寸法を計測します。借用ならびに展示が可能な資料かどうか、また可能な場合はどのようにして展示すれば良いのか等を吟味する上で、事前の資料調査は極めて重要になります。



机上に資料を広げて閲覧する（県公文書館にて）

◆令和5年2月

いよいよ詳細な展示計画を完成させる段階に入ります。例えば展示パネルやラベルに掲載する図や解説文章を作成したり、資料の配置場所や展示方法（使用する展示ケース・展示台の選定など）を検討したり等々、やるべき作業は盛り沢山です。この時期は毎日残業の連続でした。仕上がった展示計画は翌月に館内起案して、全学芸職員からチェックを受けることとなります。

一方、広報用のポスターとチラシは、デザイン作成に尽力してくれた職員のお蔭で、こちらも3月発行のめどがつかしました。

◆令和5年4月

開催を間近に控え、職員の共同作業で展示を仕上げる段階に入りました。館外からの資料借用にあたっては、資料の寸法に応じた梱包資材を用意する必要があり、多くの職員の協力を得て（段ボールを切り貼りして）、梱包資材を揃えました。また、展示室内で重たいケースを移動したり、大きな掛軸や屏風を展示したりする作業に多くの人手が必要となることは言うまでもありません。

展示室内に資料を並べた後も、直前まで細かな修正作業を続け、どうにか予定通りの期日に無事開催を迎えることができました。

（歴史部門 黒川陽介）



開展2日前、職員を対象に展示説明を実施する

令和6年度役員会・総会のご案内

同封の事務連絡にも記載の通り、新年度の役員会・総会を下記の日程で開催します。実に5年ぶりの開催となりますので、ぜひお誘い合わせの上、ふるってご出席ください。なお総会終了後には、この日から開展となる企画展「美の交差点」の展示解説会も予定しています。

【期日】 令和6年4月27日（土）

【会場】 県立博物館1階 学習室

役員会：午前10時30分から

総会：午後1時00分から

友の会「研修旅行」のご案内

こちらも同じく5年ぶりの実施となります。詳しくは同封の実施要項をご覧ください。

第一弾は、6月に大湯環状列石と伊勢堂岱遺跡をめぐる1泊2日の県内研修ツアーです。この機会に、秋田が誇る縄文遺跡群に対する見識を高めると同時に、会員相互の交流も深めてみませんか？

なお第二弾として、9月に東京方面への博物館訪問を計画しています。こちらも乞うご期待！

友の会だより

秋田県立博物館友の会 〒010-0124 秋田市金足嶋崎字後山52 Tel 018-873-4121 Fax 018-873-4123 E-mail : info@akihaku.jp

令和5年度友の会活動報告／博物館職員からの寄稿

スミレ会（植物標本整理ボランティア）

収蔵庫内では標本の同定・カード記入や配架などを行いました。未同定標本は、いつ終了するか見通しがつかない位の量があります。ラベルの文字の読み取りに時間がかかったりもしますが、粘り強く取り組んでいます。生物作業室内では主に収蔵庫内で最後まで残されていた未整理の標本を台紙に貼付したり、ラベルデータを入力したりしました。今年度は他県の標本も多かったので、見慣れない植物を知れたり、秋田県内の植物と比較ができたり、楽しく勉強しながら標本整理に取り組みました。

国立科学博物館が行っているS-Net（サイエンス ミュージアム ネット）への標本デジタルデータはコロナ感染防止のため活動停止した期間が長かった影響が大きく、提出できませんでした。

観察会は、7月は大雨のため中止しましたが、5回行いました。10月、三種町で国：絶滅危惧Ⅱ類、秋田県：準絶滅危惧種に指定されているマメ科の植物のイヌハギの閉鎖花を初めて見ることができました。

毎年、観察記録を作成して下さるまもなく94歳の方は皆勤で頑張りました。今年は腰を痛め、お休みする方々もあり、少し寂しい日もありました。2024年度は快復して皆元気で活動が出来ますように！

（スミレ会 阿部裕紀子）



イヌハギ 左：開放花 右：閉鎖花

地質ボランティア

一昨年の6月下旬、私のもとに男鹿半島・大湯ジオパークガイドの方から一通の写真付きメールが届いた。八

令和6年
3月
No.53

望台で斜面が掘削されて露頭ができ、目湧噴出物らしき地層が出現したというのである。目湧噴出物の露頭は近年ほとんど見かけることがない。この機を逃さず露頭を剥ぎ取ることができれば貴重な標本になると考え、県博の担当者に伝えた。

剥ぎ取り作業は7月3日に行なわれ、初めてとなる目湧噴出物の産状標本が県博に収蔵された。その後もなく工事は終わり、露頭は埋め戻されて観察不可能になった。短期間しか存在しなかった露頭を標本にできたのは、県博担当者が即決し、しかもジオガイドをはじめ、男鹿市役所内のジオパーク担当者や工事発注課の担当者、工事業者など多くの方々の協力が得られたからである。

自然展示室に巨大なサメの歯化石が展示されている。地元の方が採集し所有していたのだが、何なのかを知りたいし自分で持っているのはもったいないと、人を介して寄付してくれたのである。これに限らず館にはいろいろな資料が持ち込まれ、またどこそここんな化石が出ているので調査してほしいといった情報も寄せられる。その結果、実資料と資料情報が館に蓄積される。

資料収集保存活動だけを見ても、館に出入りしている私たちだけでなく、多くの県民が支えてくれている。こうしたつながりが「県民皆博物館ボランティア」として広がることを願っている。

（地質ボランティア 渡部 晟）



地層調査・標本作成風景

秋田古文書同好会

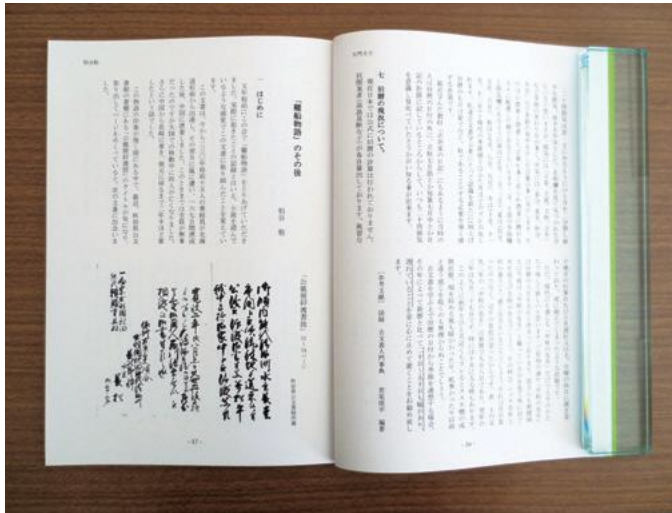
私達の同好会は今年度でちょうど発足 15 年になります。その間、色々な出来事がありました。例えば平成 23 年 3 月には東日本大震災があり、混乱によりさすがにその月の例会は中止となりましたが、次月からは通常通り再開しております。それは会員の学習意欲がいかに高かったかの顕れであります。また、この様にほとんど休みなく長く続けてこられたのは偏に新堀先生が万障繰り合わせ例会に出席し、指導して下さいたお陰と深く感謝申し上げます。

ただここ数年、新型コロナ対応の為、休会となるケースが多くなり、会員同士ゆっくり話しかう機会が少なくなり、気にかけておりましたところ「今年 15 周年に当たるので記念誌（文集）を発行したら…」との提案がありました。「そうだ？これで皆さんの日頃の研究・意見が聞ける」との思いから「15 周年記念文集」を発行することに致しました。任意とはいえ、多くの皆様から原稿を提出して頂き本当に有難うございました。

そんななか皆様の文面から古文書解説の『むづかしさ、困難さ』がひしひしと伝わってきました。と同時に、それを克服して、読み解くことが出来た時の『喜び、楽しみ』も又感じ取られ、心強く思った次第です。

いずれにしても古文書解説は一朝一夕にはいきません。『昨日より今日。今日より明日』一字でも覚え進歩、成長を実感できるよう日々の積重ねが大切と存じます。

（秋田古文書同好会 大門丈士）



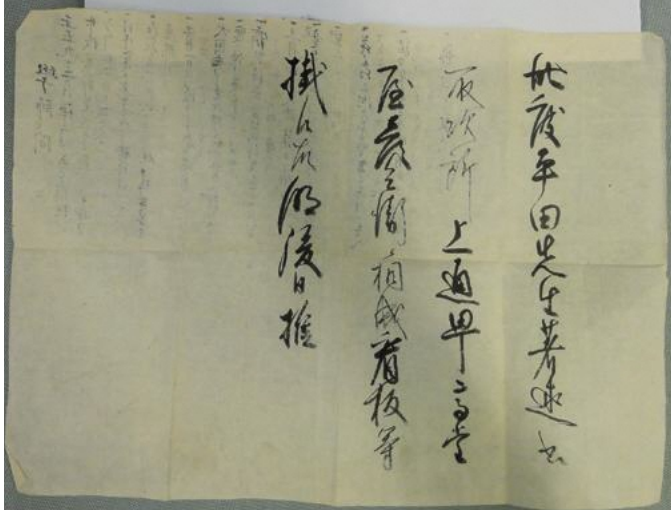
「発足 15 周年記念文集」の見開き

古文書整理ボランティア

古文書整理ボランティアでは、守屋家資料 B ～ L 約 4000 点の整理が終わり、前にもどって A 群の未整理分の整理に入り、ようやく終わりが近づいてきました。内容はこれまで同様、書状が多く、個人的なとりとめのない話題を読み解くのに苦労しています。写真は整理した

文書の一つです。「此度平田先生著述書取次所上通町高堂屋彦兵衛ニ相成看板等掛候故明後日推」とあります。わずか 34 字、年代不明の書きかけの文章ですが、このたび上通町の本屋高堂屋彦兵衛が平田篤胤の著書の取次所となり、看板などを掛けると書いてあります。幕末の平田派国学の伸張は、各地での著作の売り広めにより支えられていたことが知られていますが、秋田におけるその一端がうかがえます。

（歴史部門 新堀道生）



「平田先生著述書取次所」について記された文書

考古ボランティア

毎月隔週日曜日に開催している考古ボランティアでは、主に考古部門の博物館教室の補助や諸準備のほか、新たな教室開催に向けて製作実験や技術向上に取り組んでいます。今年度より始めた博物館教室「貝輪をつくる」は、市民団体からの要請に応え、ボランティアの協力を得ながら能代市でも同内容の講座を開催することができました。毎年恒例の「土器作り教室」では、いくつかの種類の粘土を準備して混ぜる砂の配合率も変えて焼成実験を行い、成形時に作りやすく、焼成時に壊れにくい材料を検討しました。年度後半には、新たな博物館教室の開催に向け、鹿の角を用いた釣針の製作実験を中心に活動しました。

考古ボランティアは、今や博物館教室の運営になくてはならない存在となっています。活動内容の詳細は以下の通りです（全 23 回）。

4/16、10/8 火起こしキットのメンテナンス

4/30 クルミ皮の採集

5/14、7/9、3/17 貝殻の採集

5/28、11/12 貝殻の洗浄

6/11・25 土器製作実験

7/6 カラムシ採集

7/23 土器焼成実験

8/6 貝輪製作実験

8/20 博物館教室「貝輪をつくる」補助

9/3 貝輪づくり講座の補助（能代）

9/24 博物館教室「土器作り教室」土器成形補助

10/29 「土器作り教室」土器野焼き補助

11/26、12/24、1/7・21、2/4、3/3 鹿角製釣針製作実験
（考古部門 加藤 竜）



石器を使って鹿の角の加工に挑戦

新任学芸職員の自己紹介

今年（令和 5 年度）から県立博物館に赴任いたしました、鈴木照洋です。出身は埼玉県、育ちは北海道で、秋田県には秋田大学入学を機に引っ越してきました。趣味は鉱物収集で小学生の頃にはじめ、中高生の頃は北大博物館で開催されていた、パラタクソノミスト養成講座に参加し、鉱床学や鉱物学について知りました。その後、大学在学中は鉱物採集にいそしみ、鉱山跡地や鉱物産地を探訪し、約 10 年間で 125 の鉱山跡地（秋田県内 83、県外 42）を訪れました。

修士論文では八峰町の水沢鉱山（黒鉱鉱床）を調査・研究し、博士論文では秋田・青森地域の黒鉱鉱床の研究を行いました。そのほか、秋田県内の金銀鉱床の調査を行い、現在も継続して調査活動を行っています。いずれの研究活動においても、野外調査が多く休日は山に行くことが多いです。



春の調査風景（2013 年 5 月：馬場目川上流部）



夏の調査風景（2019 年 9 月：大館市系柄沢上流部）



秋の調査風景（2014 年 10 月：大仙市山中）

秋田県立博物館の学芸員としての目標の一つは、秋田県内の全ての鉱山の資料（鉱石、坑口など遺構の記録）を保管し、後世に伝えることです。秋田県には記録に残るものだけで 200 を超える金属鉱山があったとされますが、正確な位置のわからないものや、どのような鉱石を産したか不明な鉱山が多くあります。また、鉱石試料の残された鉱山は全体の半数もありません。（秋田県立博物館で所有するのは 40 鉱山ほど）そして秋田県の鉱山は大部分が閉山して久しく、鉱山跡地自体に到達困難な場合が多々あります。このような鉱山は年々増えており、鉱石試料の収集は急務ともいえるでしょう。

また、秋田県には北から八峰白神ジオパーク、男鹿半島・大潟ジオパーク、ゆざわジオパーク、鳥海山・飛鳥ジオパークがあり、新たな鉱物産地の発見や鉱山遺構の再発見はジオスポットの拡充や活性化にもつながるため、調査活動が必要と言えるでしょう。

やることは多くありますが、当面は当館で鉱石試料を所持していない鉱山を調査し、試料の収集を行っていきたいと考えています。

（地質部門 鈴木照洋）